第三章　生活に対する評価

3･1　階層意識

「階層意識」は、主観的に生活水準を尋ねた質問に対する答えから構成される。本調査では「現在の生活水準は一般的な家庭と比べて高いほうだと思う」と、「現在の生活水準は一般的家庭と比べて低いほうだとは思わない」という二つの項目についての賛否をそれぞれ４点法で確認することによって、「階層意識」を尺度化している。

まず、「一般的な家庭と比べて高いほうだ」とする回答者は府中町 42.0%、三次市 38.2%。「高いほうでも低いほうでもない」者は府中町 30.4%、三次市 29.9%、「低いほうだ」とする回答者は府中町 27.6%、三次市 31.9%であった。

重回帰分析を行うと、「階層意識」の違いについて、最も説明力があるのは「世帯年収」であるのは当然であろう（「高いほう」.379、「低いほうではない」-.282）。府中町でも三次市でも「世帯年収 600 万円」以上で「高いほう」が５割を超える。では、「世帯年収」の他にはどのような変数が関係しているのだろうか。

まず、「生活水準が高いほう」という意識については、「就労時間」が少ないほうが「高いほう」と答える傾向がある（-.126）。それと関連し、「時間的余裕がある」という意識との相関も強い（r=.222）。したがって、「専業主婦」 や「学生（バイト収入なし）」で「生活水準が高いほう」と考える人の比率はその世帯収入に比べて高くなる。特に**三次市の「専業主婦」の世帯年収の中央値は「300 万円台」と他に比べて低く、「金銭的余裕がある」と考える人も多くないのだが、それと相反して「一般的な家庭と比べて生活水準が高いほう」だという人が平均を上回る 43.5%もいる**。これと対照的に、「家事が主の非正規雇用」は「生活水準が高いほう」の人が少ない（-.107、府中町 10.7%、三次市 30.6%）。「子どもの有無」も説明力があり、**「子あり」は金銭的・時間的余裕がないためか、「高いほう」の人が少なくなる（-.084）**。また、**「大卒以上」の学歴がある者は「生活水準が高いほう」である割合が増える（.087）**。「大卒」では府中町 53.6%、三次市 41.9%であるのに対し、「高卒」では府中町 26.7%、三次市 29.0%と約２倍の差が出ている。業種については、「公務員」が突出して「生活水準が高いほう」の割合が多い（.069、府中町 77.8%、三次市 53.9%）。このほか、「趣味関係のグループの活動」（.078）や「ボランティア団体・消費者組織・NPO 等の活動」（.082）への参加度にも説明力がある。そして、男女別に重回帰分析をすると、男性では「世帯年収」「学生（無収入）」に次いで「他地域で就学後 U ターン」の高さが目立つ（.158）。また、年収の低い三次市の階層意識の低さも有意である（-.138）。そのほか、「管理職」（.179）、「事務職」（.149）、「販売職」（.145）で階層意識は高めである。その一方、女性では「ボランティア団体・消費者組織・NPO 等の活動」に参加度が高い場合や、「公務員」である場合に階層意識は高めである（.110）。だが、非正規雇用（「家事が主」（-.146）または「仕事が主」（-.141））である場合には「高いほう」の人は少なくなる。

一方、「低いほうだ」とする回答については、「年齢」の説明力が大きい（.114）。**「低いほうだ」が 20 代では府中町 21.4%、三次市 26.6%なのが、30 代では府中町 31.5%、三次市 34.4%に上がる**。「学生（バイト収入なし）」は「低いほうだ」とする割合が少ない（-.090）。注目すべきなのは**「家事が主の非正規雇用」で、「低いほうだ」という意識が強く、半数ほどもいることだ**（.122、府中町 59.4%、三次市 45.4%）。**「専業主婦」と「家事が主の非正規雇用」の人たちでは、「世帯年収」という点ではあまり変わらないのだが、「階層意識」については、「専業主婦」の「階層意識」は低くないのに、「非正規雇用の主婦」は最も「階層意識の低い社会的属性となっている**。そして、男女別に重回帰分析をすると、いずれも「世帯年収」の説明力が最も高いが（男性.245、女性.297）、それに次ぐ説明変数が異なっている。男性では「学生（無収入）」は高めに（.194）、そして「他地域で就職後 U ターン」した層が低いほうに傾く（-.128）。**同じ U ターンでも、「他地域で就学後 U ターン」した人たちは階層意識が高めなのに、「他地域で就職後 U ターン」した人たちは、逆に階層意識が低めになる**ということである。一方、女性では「家事が主の非正規雇用」（.297）である場合、そして「年齢」が高いと低めになる傾向が強い（-.110）。

過去の社会学的研究の蓄積のなかで、「階層意識」は「世帯年収」のような変数とゆるやかに結びつきつつも、完全に経済的条件によって決定されるのではなく、生活の質の感覚や比較対象が何であるかによって規定される変数であることがわかっている。具体的な規定メカニズムについては、いくつかの説明モデルがあるが、ここではこれ以上立ち入らない。ただ、本報告で注目するのは、**「世帯年収」や「個人年収」よりもむしろ「階層意識」の高さがこの質問紙調査の他の多くの項目の回答傾向と相関しているという現象**である。そのことの持つ意味については、総括の章で引き続き考察する。

3･2 生活時間についての満足度

「時間的余裕がある生活を送っている」という項目に同意した比率は府中町 48.4%、三次市 49.7%。当然、「就労時間」の説明力が最も大きいが、これを説明変数候補から外した重回帰分析では、**専業主婦が「そう思う」傾向が際立つ（.162、府中町 72.9%、三次市 72.6%）**。専業主婦は、子どもがいる場合でも府中町 65.1%、三次市 63.4%、子どもがいない場合は実に府中町 95.5%、三次市 90.5%が「余裕がある」と回答している。先に、専業主婦の「階層意識」の高さは、就労時間の短さによって媒介されていると述べたが、それはすなわち時間的余裕の感覚があるということが考えられる。そのため、**「正規雇用」の場合は府中町 38.8%、三次市 40.2%と「時間的余裕」がある人の割合がとても少ない**。次に重要な変数は「子の有無」である。**子どもがいる場合は、府中町 42.6%、三次市 42.9%と「余裕がない」人のほうが多くなる（-.147）**。ライフコース別に見て**最も「余裕がある」人の割合が少ないのは、正規雇用の女性（子あり）**で府中町 37.5%、三次市 23.2%にとどまる。また、

同じグループ活動でも「趣味関係のグループの活動」への参加の程度が高いと「時間的余裕がある」傾向にあるのに（.146)、「学校・保育所・幼稚園の保護者または同窓会の活動」に参加の程度が高い人は、「時間的余裕がない」傾向がある（-.089)。また、**「サービス」従事者は最も「時間的余裕がある」人が少ない職業**であるといえる（-.085、府中町 41.3%、三次市 45.6%)。「建設作業」（-.081）従事者もそれに次いで「時間的余裕」がない。

「家族と過ごす時間は満足にとれている」のは、府中町 62.9%、三次市 53.6%と差がついており、地域差そのものに説明力がある（-.090)。就労時間が短ければ満足度が上がる傾向があり（.130)、「専業主婦」については府中町 82.4%、三次市 79.0%と、きわめて満足度が高い。**正規雇用に限ると「家族と過ごす時間は満足」にとれているという人は府中町 54.4%、三次市 46.8%にまで下がる**。また、「地縁組織の活動への参加」に説明力があり、参加の程度が高い人は「家族と過ごす時間」についての満足度が高い（.124)。地縁組織の活動には、家族ぐるみで参加することが多いからであろう。また、「他地域で就学後に U ターン」した層の満足度も高いが（.079)、「仕事で転入」（-.091）または「就学で転入」（-.094）してきた者については家族と離れて暮らしている者も多いからか、ネガティブになる。

「友人と過ごす時間は満足にとれている」のは、府中町 39.6%、三次市 33.1%と否定的な回答が多くなる。やはり地域差そのものが有意である（-.106)。就労時間が長ければ、否定的な回答は増える（-.298)。**正規雇用に限ると、府中町 36.9%、三次市 30.9%と「友人と過ごす時間」についての満足度はさらに低下**する。したがって、仕事をしていない専業主婦や学生の満足度は比較的高い。ただし、家事時間が長かったり、子どもがいたりすると、専業主婦でも満足度は下がる。**子どもがいると、友人付き合いに割く時間が減少することを不満に思っている人が多くなる（-.182、**府中町 29.0%、三次市 24.5%)。また、「趣味関係のグループへの参加」の度合も説明力が大きい（.158)。**友人付き合いにおいて、趣味関係のグループが大きな役割を果たしている可能性がある**。また、この項目でも、「他地域で就学後に U ターン」した層の満足度が高い（.097)。

「自分の自由な時間が満足にとれている」のは、府中町 52.5%、三次市 53.3%。**「自分の自由な時間」については子どもの有無による回答傾向の差が圧倒的に大きく、子無しの府中町 68.7%、三次市 70.5%に対して、子ありは府中町 34.2%、三次市 36.5%と満足度が半減する（-.317)**。この項目も「就労時間」に負の説明力があるが（-.295)、「家事時間」も増えると満足度が減少するため(-.215)、専業主婦の満足度は高くはない。時間的余裕はあっても、家族のために使うばかりで、自分の自由な時間はそれほどないという専業主婦の状況が見えてくる結果である。また、この他に「趣味関係のグループ」との関わりが深い場合、「自分の自由な時間」についての満足度が高まる傾向がある（.109)。

そして、「家事負担についての不満」がある者は、府中町 31.8%、三次市 33.1%。当然、「家事時間」の説明力が最も大きく、性別の説明力もそれに解消される（-.214)。一人暮らしとは違って、「父または母と同居」の場合（-.148)、または「配偶者あり」の場合（-.141)、「家事負担についての不満」を持つ者の割合が増えるが、何よりも説明力が大きいのは「子

どもの有無」である（-.186）。**子どもがいない場合に家事負担について「不満」な人の比率は府中町 19.2%、三次市 23.7%にとどまるのが、子どもがいる場合は府中町 45.2%、三次市 42.2%と倍増する**。とりわけ子どものいる女性は、府中町 50.0%、三次市 47.2%と約半数が不満を持っている。また、「就労時間」が長くなると、家事負担についても「不満」がある者の割合も増える（-.130）。

生活時間に関する以上の質問は、いずれも生活満足度との相関が高い。「時間的余裕がある」という意識と「総合的に言って、現在の生活に満足している」という意識には相関が高く（r=.338）、「全く時間的余裕がない」場合、生活に満足している者の比率は、府中町 45.5%、三次市 47.9%と低くなる。また、「時間的余裕」がない場合、収入が変わらなくても生活の質が下がるため、「階層意識」が下がる（階層意識が「高いほう」と r=.222、「低いほうではない」と r=.151）。

3・3 経済状況についてのネガティブな評価

個人の経済状況についての評価を尋ねた以下の三つの項目では、全体的傾向がおしなべてネガティブに出ている。

第一に「金銭的余裕がある生活を送っている」という項目については、賛同するのは府中町 43.3%、三次市 34.4%のみとなっている。府中町でも三次市でも、「**世帯年収」が「400~500 万円台」及びそれより低い場合、「金銭的余裕がない」という回答が多数派となる**。「世帯年収」（.369）に次いで説明力があるのが、「子あり」の余裕のなさである（.184、府中町 36.2%、三次市 31.0%）。また、職業では**「サービス」従事者（-.149**、府中町 31.1%、三次市 24.1%）**や「建設作業」従事者（-.079）で「金銭的余裕がある」という人が突出して少ない**（-.149）。**「父または母と同居」している人は、「世帯年収」は高い傾向にあるけれども、「金銭的余裕」は無いと答える傾向がある**（-.117）。また、階層意識が「高い」層の 70.0%が「金銭的」な余裕があると回答しているが、「高くも低くもない」と考えている層では 22.6%しかおらず、この間に大きな断絶があると見られる。

第二に、「今後、自分の生活が経済的に厳しくなる可能性について、心配しなくていいと思う」のは、府中町 23.8%、三次市 18.4%のみ。**８割前後が、経済的不安**を抱えている。そして、これも「世帯年収」の説明力が最大だが、年収が高くても過半数が「心配」であると考えている（.172）。その他に**「今後、自分の生活が厳しくなる可能性について、心配しなくていい」と考える傾向が最も強いのは「公務員」（.130）と「専業主婦」（.131）**、そして「学生（無収入）」である（.156）。いずれも、「階層意識」が比較的高い層である。しかし、その他の全職業について、生活が厳しくなることを恐れている傾向が顕著である。

第三に、「20 年後、自分は親の生活水準よりも高い暮らしができていると思う」人の比率も府中町 33.9%、三次市 29.4%ととても低い。「世帯年収」（.141）や「個人年収」（.155）

が高いほうが肯定的な回答が増えるとはいえ、世帯年収 400 万円以上でも府中町 38.7%、三次市 36.4%にとどまる。また、年齢差が大きく、20 代が府中町 39.7%、三次市 38.0%であるのに対し、30 代は府中町 30.8%、三次市 25.1%にまで低下する（-.227）。加齢によって、上昇移動できないという現実認識がさらに深まるのだと考えられる。そして、**「父または母と同居」している者については、府中町 28.8%、三次市 18.4%ととても低い**（-.157）。その大半が親のサポートを受けていると考えられ、そうしたなかで親よりも生活水準を超えることをイメージするのは難しいためだと考えられる。業種としては「飲食店・宿泊サービス業」は収入も少なく、ポジティブな回答の割合はきわめて少ない（-.124、府中町 13.0%、三次市 33.3%）。女性の仕事として最も大きなシェアを占める「医療・福祉」も相対的に低い（-.120、府中町 22.7%、三次市 26.1%）。このように、突出してネガティブな社会的属性はある一方、半数以上が「親の生活水準よりも高い暮らしができている」と考えるような社会的属性は存在せず、総じてネガティブな回答傾向があることが確認できる。

経済状況や将来展望についての評価は、いずれもその「世帯収入」と結びつき、「階層意識」が高めであれば肯定的な回答比率が高まる。しかし、その結びつきは緩やかであり、年収が高めの階層であっても、ポジティブな評価を下す人は半数に及ばない。**生活水準について右肩上がりの将来イメージを持てない時代であるという認識は、社会的属性を問わず幅広く共有されていると言える。**

3･4 生活満足度

「総合的に言って、現在の生活に満足である」とするのは府中町 68.4%、三次市 70.2%と肯定的な回答の割合が高い。16~39 歳を対象とした厚生労働省の「若者の意識に関する調査」（2013 年）でも 6 割台が満足と答えており、類似した結果が出ていると言える。**生活展望に対するネガティブな認識とは対照的な現状肯定傾向に注目することができる。**

「生活満足度」について、重回帰分析では「世帯年収」の説明力が最も大きい（.175）。「世帯年収 400 万円以上」で府中町 70.1%、三次市 80.6%が満足と答えているが、「400 万円未満」では府中町 57.6%、三次市 58.3%に下がる。「金銭的余裕」との相関関係が強く（r=.515）、「全く余裕がない」と答えた者については、府中町 34.0%、三次市 34.9%と大半が満足していない。「一般的な家庭と比べて、自分の生活水準は高いほうだと思う」人の生活満足度も高く（ｒ＝.463）、経済階層および「階層意識」と生活満足度とのかかわりは深いと考えられる。

ただし、非経済的要因も生活満足度に対して説明力を持っている。そのなかで最も重要なのは、「父または母との同居」の有無（-.139）。これと関連して、居住歴で「ずっと地元」にいる人が目立って低い点についても注目できる（-.088）。すでに見たように、**「父または母と同居」のほうが世帯年収は高いにも関わらず、「別居」の場合のほうが生活満足度は高**

い（別居の場合、府中町 71.4%、三次市 72.3%。同居の場合、府中町 51.2%、三次市 61.3%）。これに関連し、「配偶者・恋人等がいてその関係に満足している」（r=.366）や、「親から独立した生活が成り立つ」（r=.242）という意識も、総合的な生活満足度の高さと強く結びついている。

就業状態や雇用形態による説明力はないが、職業変数としては「製造作業・機械操作」(-.092)、「建設作業」（-.103）、「サービス」（-.090）の満足度が低い。これらの職種は学歴が低く、実際「中卒」の満足度の低さにも説明力がある（-.090）。特に「製造作業・機械操作」や「建設作業」は、単身暮らし比率や父母との同居率が高い一方で有配偶率が少なく、また、男職場で出会いに乏しいということも生活満足度の低さと関係がありそうである。

その一方、グループ活動との関わりについては、「職場参加としての地域活動・社会活動」への参加度には説明力があるが（.098）、その他の**グループ活動については、参加度が高いからといって生活満足度が上がるわけではない**。ただし、「友人関係の満足度」（r=.323）や「親との関係の満足度」（r=.341）、「職場の人間関係の満足度」などの人間関係との相関関係は有意である（r=.234）。したがって、**インフォーマルな人間関係の満足度については、生活満足度に影響している**と考えられる。

「生活満足度」のほかの項目を見てみると、「生活」の現状評価については、ネガティブな社会経済展望に反して、非経済的要因が重視されて、肯定的な全体傾向が強い項目が目立つ。以下、その回答傾向を分析してみよう。

3･5 自己充足的傾向

まず、**「毎日の生活が「楽しい」と感じられる」のは府中町 70.4%、三次市 67.9%とやはり全体傾向としては多い**。この項目は「生活満足度」と相関が極めて高く（r=.600）、その回答傾向は似ている。ただし、「生活満足度」とは大きな違いが一つある。**重回帰分析をしても、「世帯年収」のような経済状況や、「就業状態・雇用形態」などの地位の安定性に関わる変数の説明力がない**という点である。**最も強い説明力がある変数は、「配偶者の有無」**で、「配偶者あり」が府中町 77.6%、三次市 78.9%であるのに対し、「配偶者なし」は府中町 55.3%、三次市 52.2%にとどまっている（.195）。第二に、「職場参加としての地域活動・社会活動」への参加度である（.164）。「積極的に参加」している人は府中町 82.6%、三次市 76.3%と「毎日の生活が楽しい」人の比率が高い。ただし、「積極的に参加」している人自体は全体の割合のなかでは一桁台なので、多数派とはいえない。第三に、「製造作業・機械操作」（-.144）や「販売」（-.088）、「建設作業」（-.073）といった職種はネガティブな傾向が強く、「楽しい」人は約半数にとどまる。その一方、「輸送運転・機械操作」の高さに説明力がある（.080）。この点について、後述の「毎日の仕事が「楽しい」と感じられる」という項目と似たような回答傾向が見られる（r=.414）。第四に、「父または母と同居」（-.109）

の場合も、「毎日の生活が楽しい」人の比率は少ない（府中町 51.2%、三次市 51.3%）。第五に、「大卒・大学院卒」で「楽しい」人の比率が府中町 72.1%、三次市 77.5%と高めに出る（.085）。そのほか、就業状態・雇用形態で最も「毎日の生活が「楽しい」」と感じているのは「学生（アルバイト収入あり）」である（.119）。このほか、重回帰分析では検討されていないが、インフォーマルな友人関係の充足度も影響を与えていると考えられる。この項目と「友人関係に満足している」との相関は非常に強い（r=.406）。

次に**「現在の住居に満足している」人の比率は、府中町 71.6%、三次市 67.1%。やはり「生活満足度」（r=.374）や「高めの階層意識」と相関が強い（r=.277）。**重回帰分析をすると、説明力があるのは「中卒」（-.111）、「高卒」（-.126）、「専門学校卒」（-.094）の満足度の低さであるが、地域別に分析してみると、それは高学歴者の満足度が高いというよりは、主に三次市で大卒者が多い「他地域で就学後に U ターン」した人の満足度が有意に高いことなど、諸要因が複雑にかかわっていると見られる。意識調査項目では「可能ならば、今住んでいる地域にずっと住みたい」という地域定住意識との相関が強く（r=.345）、「他地域で就学後に U ターン」した人もそういう意向を持つ傾向が強い。また、「地域の総合的な満足度」との相関関係も非常に強く、それが府中町の住居満足度が少し高くなる理由であると考えられる（r=.430）。府中町に限って重回帰分析をすると、三次市とは違って、地域定住意識が強くない「学生」の住居満足度の高さが説明力を持つ。

そして、**「心身ともに健康である」人の比率であるが、これも府中町 72.6%、三次市 68.6%と高めになる。**「生活満足度」（r＝.479）や「高めの階層意識」との相関は高い（r=.284）。この項目については、最も重要な変数は「就労時間」であり（-.165）、**就労時間が長ければ「心身ともに健康である」比率はやや低くなる。**就労時間 60 時間以上の人では、府中町 62.2%、三次市 59.3%に下がる。第二に、「家事も通学もしていない無業者」（-.142）や「家事が主の非正規雇用」（-.083）の人たちの否定的な回答傾向に注目できる。第三に、「趣味関係のグループ」の関与の程度が高ければ、「心身ともに健康である」比率は高くなる(.126)。また、「大卒・大学院卒」の学歴もポジティブに作用する（.090）。

そのほか、先述したように「親」や「友人」とのインフォーマルな関係についても、世帯年収や個人年収とは関係がないにもかかわらず、「生活満足度」(親；r=.341、友人；r=.323)や「高めの階層意識」との関わりは強い。

まず、**「親との関係に満足している」人の比率であるが、府中町 85.3%、三次市 84.6%ときわめて高い。**そのため、重回帰分析でも「製造作業・機械操作」（-.116）や「建設作業」（-.106）従事者で「満足」である人が相対的に少ないのを除けば、何らかの社会的属性の違いで、回答傾向が割れるわけではない。いわゆる「パラサイトシングル」と目される「親と同居している未婚シングル」についても、「満足している」人の割合は平均値と変わりはない（83.3%）。**親との関係の満足度について、親との同居の有無による違いはない。**

また、**「友人関係に満足している」人の比率も、府中町 80.1%、三次市 77.2%と高い。これについて最も説明力があるのは「配偶者の有無」。「配偶者」がいる人の満足度は高い**

（.149）。第二に重要なのは、年齢格差（.140）。20 代に比べて、30 代は満足度が低くなる。30 代は「友人と会う時間が満足にとれていない」者の比率が高く、それが満足度を下げていると考えられる（r=.434）。第三に、親との関係と同様に「製造作業・機械操作」における満足度の低さが指摘できる（-.134）。第四に、「趣味関係のグループ」への関与の程度が高ければ、「友人関係に満足している」比率が高まる（.088）。その他、「家事も通学もしていない無業者」は否定的な回答傾向が強い（-.102）。

「生活満足度」と関わりの深い以上の５項目は、他項目と比べて肯定的回答の比率が高く、いずれも３分の２以上を占めている。**「友人関係や親との強固な人間関係に守られ、住居に不安もなく、心身ともに健康で楽しい生活ができている」と考えている人たちが多数派であるということである。**

その一方、これらの項目での回答傾向を見ると、「仕事の総合的な満足度」「自分自身の仕事の将来展望」「今後の勤務先の経営見通し」「地域の総合的な満足度」「日本社会・政治の総合的な満足度」「総合的な自分自身の現状についての満足度」「幸福度」「自分自身の将来展望」については、おたがいに、いずれも強い正の相関関係が見られる。つまり、「現在の生活に満足」である者は、「仕事」にも「地域」にも「日本社会・政治」にも満足であり、や親との関係もよく、「毎日が楽しい」と答える現状肯定傾向が相対的に強くなるあるということだ。そして、興味深いのは、**これらの項目の回答傾向に共通しているのは、必ずしも「世帯年収」や「個人年収」との直接的な結びつきはないが、「階層意識」との相関関係についてはいずれも強い点である。**つまり、**たいして年収が高くなくても、「友人関係」や「家族との関係」が充実するなど、生活のクオリティを高める要因があるならば、自分の生活水準を高めに見積もる傾向がある**ということである。この問題については、「コンサマトリー（＝自己充足）」傾向の問題として、総括の章で引き続き考察する。

3･6 結婚生活とその見通し

「血縁以外に自分を必要とし大切に思ってくれる人（配偶者または恋人等）がいて、その関係に満足」だという人の比率は、府中町 71.9%、三次市 71.3%。ただし、この項目は「配偶者の有無」によって大きく分かれる。「配偶者がいる人」については府中町 90.7%、三次市 89.7%が満足だと答えている。そのなかでも「子あり」のほうが「子無し」よりも（-.168）、30 代のほうが 20 代よりも、満足だという人は減少するが（-101）、大半が「満足」という状況には変わらない。

ところが、「配偶者がいない人」については、府中町 37.8%、三次市 42.7%とネガティブな答えのほうが多くなる。このデータからは、**６～７割の未婚者には恋人等がいないと推定され、また府中町のほうがその割合が低い可能性**が示唆される。そして、女性で恋人等がいて「その関係に満足」なのは府中町 37.9%、三次市 47.3%であるのに対し、男性は府

中町 32.2%、三次市 37.8%とより低い。この項目について、最も説明力が大きいのは、「職場参加の地域活動・社会活動」への参加度である（.310）。こうした活動への参加が、交際可能性を広げているということが考えられる。年齢による違いは当然大きく、30 代のほうが否定的な回答が増える（-.209）。また、単身暮らしなどに比べ、「父または母と同居」の場合にネガティブさが強まる（.163）。**「仕事が主の非正規雇用」の場合も、「満足」な人の割合は府中町 34.6%、三次市 41.4%とやや少なく、経済的な理由が交際に響いている**ことがおおいに考えられる（-.120）。だが、一概に社会経済的にアドバンテージがあれば、交際の可能性が増えるというわけではない。例えば、この項目では低学歴層よりも「大学卒・大学院卒」でネガティブな人の割合が増えているが、女性の高学歴の未婚女性にその傾向が強い（-.145）。このほか、製造業では男性を中心にネガティブな回答割合が高い。男性割合が多く、出会いの機会が少ない職場環境であることが関係している可能性がある

配偶者がいない人で、**「今後、結婚できないのではないかと心配」なのは、府中町 64.3%、三次市 68.5%と三分の二ほど**を占める。重回帰分析では、「大学卒・大学院卒」で心配である人の割合が増える（-.278）。女性のほうが男性より不安が大きく（-.202）、特に**「大卒・大学院卒」未婚女性で「結婚できないかも」不安を持つ比率がとても高いことがわかる**(府中町 77.2%、三次市 91.6%)。「年齢」が上がる場合、「不安」な人の比率は増える（-.167）。30 代男性では府中町 54.5%、三次市 61.3%が、30 代女性では府中町 87.5%、三次市 75.0%が「不安」を抱いている。そして、「世帯年収」が低い場合ではなく、むしろ高い場合に「心配」とする比率がむしろ上がる（-.182）。また、「趣味関係のグループ活動」に参加度が高い人は「今後、結婚できないのではないか」と考える人が少ない（.197）。交友関係が豊かであることがその理由であろう。そして、結婚に対する不安がある人は、「自分の将来には明るい希望がある」比率も低い（r=.383）。

一方、配偶者がいる人で、「結婚生活を続けられないのではないかと、心配」であると回答したのは、府中町 27.5%、三次市 35.2%となっている。年齢が上がると「心配」とする比率が上がる（-.123）。学歴による違いが大きく、「大卒・大学院卒以外」で府中町 30.1%、三次市 37.2%と「心配」である人の比率が若干増える。学歴の違いは、将来の経済的な見通しの格差と関わっている可能性がある。

それでは、家族形成についての将来展望はどうだろうか。「20 年後、子育てを経験し、配偶者と暮らしていると思う」人は、配偶者がいない者は半数をやや上回る程度（府中町 52.1%、三次市 56.2%）にとどまり、既婚者（府中町 89.5%、三次市 86.8%）と大きな差がついている。**未婚者の半数近くの者が、結婚して子どもを育てるというごく一般的なライフコースを歩むという将来像を描いてはいない**。未婚者に限って重回帰分析をすると、年齢による違いは大きく、30 代未婚者については、男女ともネガティブで、府中町 26.7%、三次市 43.0%ときわめて低い（.272）。**雇用形態による格差**があり、「家事・通学をしていない無収入」（-.145）がとても否定的であるほか、「仕事が主の非正規雇用」の場合も府中町 28.6%、三次市 12.5%と割合は非常に低い（-.127）。やはり将来の経済見通しとの関連

が深いようで、「20 年後、親よりも高い水準の暮らしをしていない」と考える人はネガティブな回答傾向が強い（r=.357）。これに対して、「職場参加の地域活動・社会活動」の参加度の高い場合は比較的楽観的で（.201）、「自営業主・家族従業員」も比較的ポジティブである（.132）。

3･7 親への依存

自分の生活が「親から完全に自立している」と考えている者の比率は、府中町 51.9%、三次市 44.4%。「親と同居」している者に限れば、府中町 1.8%、三次市 13.1%しか「自立している」という人はいない（-.472）。興味深いのは、「親と同居」している者は、配偶者のいる場合であっても「自立している」という者の比率がほとんど変わらないという点である（それぞれ府中町 8.3%、三次市 8.8%）。また、同じ既婚女性でも、「専業主婦」は「自立している」という回答が高いが、それ以外の女性ではむしろ少ない。**結婚後も多くの者が、家事や育児、あるいは経済面において親の支えを必要としているために、「自立していない」と考えている**。「親との同居」の次に説明力があるのは、「個人年収」（.148）。「個人年収 300 万円未満」では、「自立している」と考える者は、府中町 44.1%、三次市 36.4%と少なくなる。年代で見ると、府中町（20 代：33.4%、30 代：63.1%）、三次市（20 代：35.0%、30 代：51.1%）となっている。**30 代になっても「自立できていない」と考える者の比率が高く、特に親との同居率が高い三次市では約半数に達している**ことに注目できる。

「親の援助が全くなくても、今の自分の生活は成り立つ」と考えている者は、府中町 58.3%、三次市 50.2%である。「親と同居」している者については府中町 79.3%、三次市 69.5%と高いが（-.337）、そのうち未婚者（「パラサイトシングル」と言われる）だけを取り出しても比率はあまり変わらない（府中町 79.8%、三次市 67.2%）。「親と同居」している場合は、配偶者がいるとしても、かなりの部分が「親の援助」を必要としているということである。特に「子あり」の場合は、「親の援助」が無くては現在の生活が成り立たないという者の比率は増える(-.156)。特に「子あり」のうち、「親と同居している者」については府中町 81.8%、三次市 80.6%に達する。**いわゆる「パラサイトシングル」のみならず、多くの既婚者も親に依存している**ということがわかる。このほか、「個人年収」の説明力も高く、「個人年収」が低い場合、「親の援助」が不可欠と考える者の比率が増える（.208）。この項目についても、「専業主婦」は「親の援助が無くてもかまわない」と考える人の比率が高く、それ以外の女性と差がついている（.112）。そして、「公務員」は「親の援助が無くても」かまわないという人の比率が全業種のなかで最も高い（.071）。

3･8 社会状況への経済的適応―ゼロ成長時代のジレンマ

先にも見たように、社会的属性を問わず、自分の生活を取り巻く経済的状況について明るい見通しを持てる人は少なく、ネガティブな認識は広く共有されている。それでは、生活水準が上がらないゼロ成長経済の時代が続くとして、価値観の面でもこの状況に適応しようという意識が見られるのであろうか。

まず、「将来の生活のことを考えて、お金をなるべく使いたくないと思っている」人は府中町 62.9%、三次市 57.9%と比較的割合が高い。バブル経済を知らない平成世代は「嫌消費」傾向をその特徴としていると言われるが、この結果からも消費について消極的な全体傾向が見える。この傾向は、年齢が高まるほど弱く（-.099）、「男性」のほうが「女性」よりも弱いとは言え（.083）、どの属性でも過半数がこの考え方を支持している。**特に収入に関わる変数が説明力を持たず、「階層意識」とも相関しないということは、消費を控える傾向は収入の低い人に特に強い考え方というより、時代的あるいは世代的な共通認識となっていることを示唆する**。そんななか、「中卒」者については、年収は低いにも関わらず消費を控える傾向は弱い（-.133）。

それでは、消費を控える傾向が、ゼロ成長経済のもとでの単なる消費の萎縮ではなく、「スマート」で「成熟」した消費のあり方を志向する傾向につながっているのか。その可能性を見るために、「環境や健康の問題に関心があり、そのために良いことならお金をかけてもかまわない」という項目を用意したところ、府中町 53.8%、三次市 52.6%と回答が割れた。重回帰分析では、やはり「世帯年収」に説明力はなく、「高卒」（-.102、府中町 38.6%、三次市 41.3%）や「中卒」（-.092）の低さが目立つが、「短大・高専」に比べて「大卒」も特に高いとは言えない。この考え方についてポジティブな回答傾向が強いのは、「他地域で就学後 U ターン」した層（.088、府中町 62.8%、三次市 58.6%）、そして「趣味関係のグループに関わりの程度が強い層」（.078、府中町 56.7%、三次市 61.8%）である。**「他地域で就学後 U ターン」した層は、「趣味関係のグループ」を始め、ソーシャルな活動について一般的に積極的な層であり、「環境」や「健康」というキーワードに反応する度合も比較的高いようだ**。一方、意識調査項目間の関係を見てみると、「階層意識」との間には正の相関が見られる（「生活水準は高いほう」r=.252、「生活水準は低くない」r=.141）。各種の満足度もおしなべて高い傾向にある。

それでは、ゼロ成長経済で生活水準が上がらないこと自体は、どう評価されているのだろうか。**「社会情勢を考えれば、今後、生活水準が上がらなくても仕方ない」と考えている人は府中町 40.2%、三次市 41.1%と半数を下回る**。「世帯年収」や「個人年収」が高いからといってこの考え方を支持する人が増えるわけでは必ずしもないが、「階層意識」の高さや各種の満足度とは相関がある。つまり、**収入階層とは関係なく、右肩上がりの社会ではない現実を素直に受け入れている人のほうが、生活・仕事・地域・日本社会・人生のいずれについても総合的な満足度が高い**ということである。そして、この項目について重回帰分

析で最も強い説明力があるのは「就労時間」である（-.131）。男性も女性も「就労時間」が短い人ほど、この考え方を受け入れる傾向にある。「全くそうは思わない」と答えた男性の週当たり「就労時間」の中央値は、府中町 57.5 時間、三次市 50 時間ととても長い。しかし、長時間労働に従事する者は、就労時間が長いからといって、特に「個人収入」が多いわけでも、「世帯収入」が多いわけでもなく、その「階層意識」はやや低めである（個人年収 400 万円未満は府中町 50.0%、三次市 66.0%）。つまり、就労時間の長い人たちは、特に経済的に厳しいわけでもないが、「生活水準が上がらなくても仕方ない」と価値観を転換することができず、悲観的な傾向が強いことが示唆される。

次に、「自分なりにお金をかけずに楽しく暮らす方法はあるので、今後、生活水準が上がらなくてもかまわない」という項目について。これは、**ゼロ成長経済の時代に合わせた「ダウンシフター」的な価値観であり、ロハス系の雑誌に出てくるような言い方だ。シェアハウスなどの脱消費主義的な文化にも通じる考え方である。**この項目についても、肯定的回答傾向のある人は階層意識が高めであり、総合的な満足度が高い（「生活水準が高め」r=.213、「生活水準が低くない」r=.118）。ただし、**この価値観については、大半の者に受け入れられておらず**、肯定的な回答をする者は府中町 21.4%、三次市 20.1%にとどまることにも注意が必要だ。重回帰分析で重要とみなされた変数は第一に「子どもの有無」（-.166）。子どもがいる場合は 19.0%、三次市 17.3%とさらに少ない。**子どもがいれば、子どもたちの立場から考え、「今後、生活水準が上がらなくてもかまわない」とは言いにくくなる**、ということであろう。第二に、「サービス」で肯定的な回答をする者は府中町 19.5%、三次市 13.8%と非常に少ない（-.122）。「製造業」（-.073）も同様に少ない値が出ているが、これらはいずれも総合的な生活満足度についての項目でも低い値を出している属性である。そして、第三に「世帯年収」（.111）である。「世帯年収」が 600 万円以上あると、若干増えるが（府中町 25.8%、三次市 20.5%）、それでも大半が否定的であることには変わらない。そのほか、「就労時間」が短ければ、この価値観を受け入れる傾向が少し増えるが大きな差ではない（-.093）。多くの人は金銭的に余裕がなく、「お金をかけなくても楽しく暮らす方法」があったとしても、「生活水準が上がらなくても仕方ない」とまでは考えられない人が多数派を占める。ゼロ成長経済に適応するべく、脱消費的な価値観が様々に提案されているが、そうした考え方は経済的に厳しい層にとっては受け入れにくいものであるということが示唆される。

3･9 趣味

従来は侮蔑的な意味を伴っていた「おたく」という言葉だが、若者文化のメインストリームにおいて承認されるようになり、様相が変わってきたとしばしばいわれる。実際、**「自分の趣味には「おたく」的要素があると思う」者の割合は三分の一超**（府中町 35.8%、三

次市 36.7%）で、非常に高くなっている。重回帰分析によると、性別による違いが最も大きく（.-191）、男性は４割台で（府中町 48.6%、三次市 45.4%）、女性は３割ほどである（府中町 28.5%、三次市 30.6%）。また、子の有無による違いも大きく（-.151）、子無しでは府中町 43.6%、三次市 49.1%とさらに割合は高くなる。「父または母と同居」は有意に高い一方（.146）、個人年収は低い傾向にある（-.100）。**子無しの 20 代男性に限ると、府中町 61.6%、三次市 55.4%と過半数が「おたく」を自認**している。この世代のなかで、「おたく」がネガティブワードでなくなっているということを確認できる。ただし、年齢による比率の差は、重回帰分析では「父または母と同居」「子の有無」の変数の効果に解消される。

「おたく的要素がある」人は、その趣味に「こだわり」があり（r=-.390）、「余暇の時間は、一人で楽しみたい」という回答が目立つ（r=.261）。そして、「自分が一生暮らす場所として、東京のような「大都市」はいいと思う」と考える人の比率が有意に高いが(r=.119)、その一方で「休日には、なるべく現在住んでいる地域以外の場所に出かけたい」という人は少ない（r=-.121）。

一方、「自分の趣味には「ヤンキー」的要素があると思う」人の割合は、府中町 5.9%、三次市 5.7%と非常に低い。**不良系の若者文化を指す言葉として、広く普及している「ヤンキー」という言葉であるが、オタクとは対称的にすっかりネガティブワードになっている。**抵抗文化としての積極的な意味は失われ、「DQN」という言い方に象徴的なように、むしろ社会の規範から外れる者たちに対する侮蔑的な呼称として一般化する傾向にあり、**「自称ヤンキー」は非常に少ない**。重回帰分析では、性別が最も説明力を持ち（-.154）、男性に限れば府中町 10.2%、三次市 7.5%と比率は上がる**。約１割の男性が「自称ヤンキー」**であるということだ。次に説明力があるのは「建設作業」の高さで（.125）、比率としても突出している（41.2%）。また、「中卒」で高い一方（.091、25.0%）、「大卒・大学院卒」（-.118）や「専門学校卒」（-.088）の比率はやや低い。職場が地元で若くして就職しているというプロフィールが見えてくる。年収等の経済状況について、高くも低くもなく、現状肯定的な回答傾向も強いわけでも弱いわけでもない。階層は「低いほうだ」と考える人がやや少ない（.155）。

原田曜平の「マイルドヤンキー」論などでは、「ヤンキー」の消費意識は旺盛で、地元好き、そして人間関係は内向きとされている。確かに、「自称ヤンキー」が多い「中卒」「建設作業」については、消費を控える傾向が他よりも弱いが、特に「ヤンキー的ではない」人と比べて「定住意向」が突出しているわけではない。また、人間関係については、「自分と異なる世界の人と出会う機会に恵まれ、視野を広げられていると思う」人の比率がむしろ高いなど（r=.101）、特に内向きな価値観が強いというわけではない。

「自分は趣味に関して、個性やこだわりが強いほうだと思う」という項目については、府中町 45.9%、三次市 48.8%とそれほどに強くない。これが地方の特徴であるのか、あるいは時代的・世代的特徴であるのかについては、さらに考察する必要がありそうである。ただ、ここで注目したいのは、社会的属性による格差が大きい点である。重回帰分析によ

れば、**「趣味の個性やこだわり」については「性別」による違いが最も重要で（-.224）、男性では府中町 55.8%、三次市 62.6%と過半数を占めるのに対して、女性では府中町 40.2%、三次市 39.3%と少数派にとどまる**。「子どもの有無」による差も大きく（-.153）、子無しでは府中町 54.2%、三次市 55.6%だが、子ありでは府中町 46.9%、三次市 42.0%と下がる。そして、「趣味関係のグループ」（.092）あるいは「職場参加の地域活動・社会活動」（.095）への参加の度合が高いと「個性やこだわりが強い」傾向が強い。「個性やこだわり」というと個人主義的なニュアンスがあるが、**グループ活動に積極的に参加し、コミュニカティブな志向性が強い人のほうが、趣味の「個性やこだわり」も強い**ということであろう。このほか、「階層意識」が高めだと「個性やこだわり」志向が強くなる（「高め」r=.133、「低くない」r=.170）。「環境や健康」にお金をかけていいという意識との結びつきも強い（r=.169）。

また、「趣味へのこだわり」がある人は、「無理をしてでもチャレンジ」してみたいとか（r＝.182、）「組織に縛られない自由な考え方」を重視したいとか（r=.110）、「人とは異なる自分の個性」を磨きたいといった（.180）、アクティブな自己実現志向とも関係が強い。だが、その一方で、**「趣味」に「個性やこだわり」を求めるのは、子どものいない男性に偏っている。また、就労時間が長ければ、ネガティブな回答の割合が増える**（-.084）。こうした格差も念頭に置きながら、地方の若者文化のあり方について考察していく必要がある。

3･10 生活時間についての価値観

「余暇の時間」の過ごし方について、「家族とともに楽しみたい」「友人とともに楽しみたい」「一人で楽しみたい」と３つの項目を立て、それぞれに同意するか否かを４点法で尋ねている。それによると、突出して多いのは「家族とともに楽しみたい」で、府中町 83.6%、三次市 83.9%。「友人とともに楽しみたい」「一人で楽しみたい」はそれほど差が無い（「友人」が府中町 62.6%、三次市 66.9%、「一人」が府中町 62.2%、三次市 58.4%）。それぞれの選好についてはライフコース上の地位の違いと対応し、社会経済格差とも階層意識とはとくに関係が見られない。

「余暇の時間は、友人とともに楽しみたい」に関して、重回帰分析では「年齢」の説明力がもっとも強い（-.166）。20 代で府中町 74.2%、三次市 75.3%なのが、30 代で府中町 56.1%、三次市 61.8%にまで下がる。また、**「趣味関係のグループの活動」への関与の度合いが強い人は、「余暇を友人とともに楽しみたい」傾向が強い**（.140）。「趣味関係グループの活動」への参加については、趣味そのものだけではなく、友人作りが目的となっているという側面が大きそうだ。また、「輸送・機械運転」従事者は、一人でいることを楽しむ傾向があるためか、「友人とともに楽しみたい」人は少ない傾向にある（-.116）。そして、「余暇を友人とともに楽しみたい」人は、地域での交流に積極的である。「地域活動に積極的に参加したい」（r=.169）や、「現在住んでいる多様な人たちと交流したい」（r=.225）といっ

た考え方を持つ人が多い。「休日には、なるべく現在住んでいる地域以外の場所」にも出かけたいとか（r=.200）、「海外」にも行ってみたい（r=.224）などと、地域外への移動についても積極的である。

「余暇の時間は、家族とともに楽しみたい」に関しては、重回帰分析では「配偶者の有無」による違いが大きいとわかる（.357）。配偶者がいない場合は府中町 64.3%、三次市 65.4%であるのに対し、有配偶者の場合は府中町 94.2%、三次市 95.4%とほとんどの場合が「余暇は家族で楽しみたい」と考えている。また、「子どもの有無」による違いも大きく、子どもがいると、家族と過ごしたい人が増える（.169）。そして、「友人とともに楽しみたい」人と同様に、「地域活動に積極的に参加したい」（r=.163）とか、「現在住んでいる地域の多様な人たちと交流したい」（r=.160）気持ちが強い。そして、「幸せ」であるという意識との相関がとても高い（r=.331）。その他、ファミリーでの活動を重視するため「現在住んでいる地域での生活には、自家用車が欠かせない」と考える傾向が強い（r=.187）。そして、「一生住む場所」として「中国山地のような田舎が理想」と考える傾向がある（r=.112）。

「余暇の時間は、一人で楽しみたい」に関して、重回帰分析ではやはり「配偶者の有無」による違いが大きい（-.200）。配偶者がいない場合は府中町 74.8%、三次市 69.3%と一人で楽しむ時間を重視していることがわかるが、配偶者がいると府中町 55.0%、三次市 51.7%にまで下がる。ただし、その一方で、**「家事が主の非正規雇用」は、配偶者がいるにも関わらず「一人で楽しみたい」と考える傾向が比較的強い**点は注目に値する（.113、府中町 71.9%、63.9%）。そして、「余暇を一人で過ごしたい」人は「心身ともに健康」ではないという人（r=-.095）や、「幸せ」ではないという人（r=-.113）の比率が高い。そして、「一生住む場所」として「広島のような地方都市が理想」と考える傾向がある（r=.113）。

3・11　家族のケア負担についての考え方

「親が要介護になったら、子どもが家で面倒をみるのは当然だと思う」人は、府中町 62.4%、三次市 58.0%。**介護の負担について家族によるケアを基本とする考え方は、マジョリティの共通認識になっている**ということが確認される。重回帰分析では、「家事時間」が増えると否定的な回答が増え（-106）、それに媒介されて有配偶者も否定的な割合が高くなる。配偶者無しでは府中町 65.5%、三次市 63.0%なのが、有配偶者は府中町 55.4%、三次市 54.8%とやや下がる。家事負担の多い者は、介護負担の当事者としての役割期待を意識し、現実的観点から否定的になると考えられる。また、結婚前は親と同居し、面倒を見なくてはいけないと意識していても、結婚して離家したのちは「家で面倒をみる」という意識が薄れるために否定的になるということもあるだろう。

この価値観は、家族との関係との良好さを示す項目と強く関連している。「親との関係に満足している」（r=.253）とか、「余暇の時間は、家族とともに楽しみたいと思う」（r=.113）

といった項目との相関が強い。そして、「他地域で就学後 U ターン」してきた者は、「子どもが家で面倒を見るのは当然」と考える傾向が特に強いが、これもこの層における実家志向の強さが関連していると見られる（.086）。業種としては「サービス業（その他）」従事者が「当然だと思う」意識が強い（.080）。また、この考え方に同意する人は、特に世帯年収が高いわけではないのに、階層意識が高く（「高いほうだ」r=.097、「低いほうではない」r=.121）、生活満足度等について現状肯定傾向が強い（r=.161）。

3･12 男女の家事分担についての考え方

「男性も女性と平等に家事（育児・介護を含む）分担をするのが当然だと思う」人の割合は、府中町 75.1%、三次市 80.4%と圧倒的に多い。重回帰分析をすると、性別、世帯年収、学歴による比率の差は有意ではない。性別についていうと、男性（府中町 75.5%、三次市 81.3%）に対して、女性（府中町 74.8%、三次市 79.8%）となっている。興味深いことに、**否定的な答えが増えるのは、最も家事時間の長い「専業主婦」（府中町 63.5%、三次市 77.5%、-.084）である**。「専業主婦」のケア役割意識が、この回答に否定的な影響を与えているのではないかと考えられる。また、「自営業主・家族従業員」（-.132）あるいは「経営者・役員」（-.095）の否定的な傾向も強い。年齢の説明力も有意で、年齢が若いほうが「当然だと思う」割合は高い（-.075）。「20 代」では府中町 82.1%、三次市 81.5%であるのが、「30 代」では府中町 70.7%、三次市 80.0%となっている。経年変化がわからないので加齢効果か世代効果かは判別できないが、少なくとも**若い世代のほうが性別役割分業に肯定的という「若者保守化論」の根拠とされるような傾向は、この調査では確認されなかった。**

調査結果からは、府中町も三次市も変わらず、男女間に家事分担についての伝統的な性別役割分業観がなくなっていることが確認された。だが、男性がその意識の高さという点では十分に高くなっているにもかかわらず、実際の家事時間については女性のほうが圧倒的に長い。実態と意識のずれは非常に大きく、その点についてさらに検討を要する課題であると言える。